

UEDA 音楽療法センターRitomico
－令和7年度 実施報告－

高橋 和奈枝

長野医療衛生専門学校 音楽療法士学科

はじめに

長野医療衛生専門学校は令和5年9月に UEDA 音楽療法センターRitomico を開設した。令和7年度はチケット制（8回1クール）による児童のための音楽療法と、成人のための音楽心理療法を実施した。児童の音楽療法はクール終了ごとに保護者との振り返りの時間を設け、継続もしくは終了の意向を確認しながら、継続の場合には次クールの目標を共有した。

1 活動実績

令和7年度は、10名の児童（上田市8名、東御市1名、千曲市1名）が来室した。それぞれの児童の来室の参加時期と令和7年度の参加回数の実績を表1に示す。

表1 参加時期と参加回数（令和7年度）

対象児 A	9 クール目 2025.4～2026.3	24 回
対象児 B	8 クール目 2025.4～2026.3	22 回
対象児 C	7 クール目 2025.4～2026.3	19 回
対象児 D	7 クール目 2025.4～2026.3	17 回
対象児 E	6 クール目 2025.4～2026.3	16 回
対象児 F	4 クール終 2025.4～2026.2	19 回
対象児 G	2 クール目 2025.4～2026.3	4 回
対象児 H	1 クール目 2025.11～2026.3	5 回
対象児 I	1 クール終 2025.4～2025.8	3 回
対象児 J	体験 2025.12	

性別は男子6名、女子4名。年齢層は中学生が2名、小学校高学年が3名、小学校低学年が3名、

未就学が2名である。自閉スペクトラム症などの発達障害児やダウン症などの知的障害児が通う。

昨年度に引き続き、今年度も幅広い層の見学を受け入れた。卒業生（音楽療法士・介護職など）や在校生（音楽療法士学科）、本校職員（言語聴覚士学科）、市職員（松本市など）、対象児の家族（父母、兄弟姉妹など）が音楽療法を知るための場として、見学参加を行った。

音楽心理療法は延べ8名が受療した。

2 振り返りを通して～「つなぐ」役割とは

本校の音楽療法士学科で目指せる資格は一般社団法人日本音楽療法学会認定音楽療法士である。兼ねてから取り組まれている音楽療法士の国家資格化については、現在、国家資格の名称として「音楽支援士」が検討されているということ、その役割は病気や障がいなどでコミュニケーションが困難な対象者と支援の専門家を「つなぐ」ものであることなどが報告されている。本稿では、令和7年度の児童の音楽療法を振り返り、加藤（2007）の示した個人観察記録11項目¹⁾を視点として、「つなぐ」役割について考察したい。

1) 音・音楽への興味・関心

児童が家庭で YouTube などを通して楽しんでいる音楽について、しばしば保護者あるいは本人より報告を受けた。ジャンルはJ-pop、K-pop、子ども向け番組の曲、ミュージカルの音楽、ダンス音楽、合唱曲など多岐にわたる。それらの楽曲を歌唱、楽器、身体、鑑賞活動などで取り入れること

によって、好きな音楽を自分自身で何らかの方法で表現する機会となった。家庭で好みの音楽を探し、見つけ、聴いて楽しみ、Ritomico ではそれらの曲を歌い、演奏し、表現する循環は、音楽への興味・関心を深め、家庭と Ritomico で過ごす自分をつなぎ、自分らしさとつながる一助になったのではないかと考える。

2) 楽器への興味・関心

Ritomico に通う児童の中には、言葉でのコミュニケーションが困難なケースも多くみられる。その中で、児童が表現しやすい楽器に出会い、音を出してみることは、児童の内言語や感情など内側に眠っているものを、楽器を通して安全に外に出していく一助となる。またそれが実現することで、楽器への興味・関心が高まり、集中して心ゆくまで楽器に取り組むようになる姿が見られた。ピアノ、木琴、太鼓やシンバル、シェイカー類など音階のあるものもないものもあるが、特に言語での表現が困難な児童の内と外をつなぐ役割を担えたのではないかと考える。

3) 人への興味・関心

自閉スペクトラム症の児童の中には、人への興味・関心があったとしても、それが表現しにくかったり、周囲がそれらを理解しにくかったりするケースも見られた。しかし、セラピストの頭皮の匂いをかいだり、セラピストの手をクレーンのように扱って楽器の音を出したりと、一つ一つの行動には人への興味・関心の芽生えが感じられた。回数を重ねるごとに、セラピストや保護者と音楽を通して一定のルールの中で遊ぶことが楽しみとなり、音楽が自分と他者をつなぐ役割を果たしながら、人への興味・関心を育てることができたのではないかと考える。

4) 情緒面での様子

入室した時点で、外であった苦しいことや悲しいことから気持ちを切り替えられず、泣き出してしまふ児童や、セッション中に思い通りになら

ずにパニックになる児童も見られた。そのような場面では、この場が安全な場であることを伝え、本人が落ち着ける場所で、本人が落ち着くまで泣いたり怒ったりできるようにした。一定時間、泣いても怒っても、すっきりすれば自ら座席に戻り、音楽活動に切り替えられた。一定時間、自分の気持ちとつながる時間を持ち、周囲も「悲しかったんだね」「悔しかったんだね」「泣いてもいいんだよ」「怒ってもいいんだよ」とそれを認めていくことで、無理に気持ちのコントロールを促すのではなく、自分の力で気持ちと向き合い、調整していく力を育めたのではないかと考える。

5) 運動機能面での様子

Ritomico のプログラムでは、ダンスやトランポリンなど体を大きく動かす粗大運動のための活動と楽器の操作など細かな動きを要求する微細運動のための活動がある。ダンスやトランポリンは音楽の楽しさにも助けられ無理なく継続できるプログラムで、気持ちの発散にもつながる。楽器の活動は発達の段階に合わせて「触れる」「振る」「叩く」「吹く」「踏む」など段階的に提示することが可能で、今年度はより微細な「回す」などの活動も取り入れた。いずれも自分の身体とつながる重要な活動で、次項の身体表現・ボディイメージの育ちにもかかわってくる。

6) 身体表現・ボディイメージ面での様子

前述の運動機能面の発達は、触覚・固有受容覚・前庭感覚などの感覚情報に基づいてボディイメージを形成していく。ボディイメージが形成されると身体表現がより豊かになる。豊かな身体表現は前述の情緒面での様子の項で述べた気持ちの解放にもつながり、後述する楽器の操作における豊かな表現や、コミュニケーション行動、ことばの代替表現にもつながる。Ritomico のプログラムにはトランポリンをはじめとする自由でクリエイティブな身体表現を発揮できるものがたくさんあり、自分の気持ちとつながる、自分の内と外をつなぐ

役割を果たしていると言える。

7) 楽器の操作面での様子

前述したように、楽器の操作には「触れる」「振る」「叩く」「吹く」「踏む」などがあり、発達段階に合わせて、一人一人に合った楽器を選ぶことができる。また繰り返し取り組むことで、これまでにできなかったことが少しずつできるようになり、自分の成長を自分で確認できる側面がある。今年度ピアノの自由即興演奏を楽しんだ女兒は、自由に弾く楽しみの他に、電子ピアノの音色を変えるスイッチやリズム機能のスイッチなどの操作なども覚え、家庭や学校でもピアノを楽しんでいると聞いた。ヴィゴツキーの発達の最近接領域（一人ではできないが、あと少し支援があればできる領域）における工夫によって、児童が自分でできることを増やし、自己肯定や自己成長につながる一助となったのではないかと考える。

8) 特徴的な行動

児童によってそれぞれ特徴的な行動が見られた。部屋の絨毯への反応（入室すると靴下を脱ぐ、寝転がる、ぞうきんがけのように絨毯の触覚を味わうなど）はそれぞれの触感覚の好みや強さを教えてくれる重要なサインとなった。また、活動中に物を並べはじめたり、物と物とをつなげはじめたりして、自己の世界に没頭する行動も見られた。これらも児童による「いっぱいいっぱいだよ」「いま、これに集中させて」という自己調整のサインと受けとめ、セラピストの提供する音楽の刺激量の見直しにもつながった。特徴的な行動は、児童の好みや困りごとを教えてくれる重要なメッセージであり、それを受けとめることで、セラピストと児童の関係性をつなぐ役割を果たしたと考える。

9) コミュニケーション行動

Ritomicoで行なわれる音楽の力の核となる部分は、コミュニケーション行動を促進することではないだろうか。言葉でのコミュニケーションが困難な児童にとって、音楽を介したコミュニケーションは得意で楽しめる児童が多く、楽器同士のや

りとり、身体表現と音楽のやりとりなど、児童によってやりとりの方法も様々である。国家資格化における他の専門家に「つなぐ」役割の一つには、コミュニケーション行動への意欲を高めることが挙げられると考える。音楽に備わる楽しさが行動意欲やモチベーションを高め、コミュニケーション行動につながったのではないかと考える。この意欲やモチベーションは次項のことばの理解・表現にもつながる大きな要素となる。

10) ことばの理解・表現

令和7年度は、ことばの表現として様々な新しい活動に挑戦した。言葉が出始めた児童に対しては、「ぼんぼんぼん」（数を数える遊び）、「ならべかえてみよう」（文字をならべかえて単語を作る遊び）、「てにをはあそび」（言葉のカードに助詞を加えて文章をつくる遊び）、「動物園へ行こう」「SDGsのうた」「日本地図の歌」（ジャンルごとに語彙を増やす遊び）などを取り入れた。言葉がまだ出ない児童に対しても「歌かるた」（聴こえてきた音楽を選ぶかるた）、「物語づくり」（カードを使って物語をつくる遊び）、「ジェスチャークイズ」（カードの内容をジェスチャーで伝える遊び）を通して、ことばの理解・表現を育めたのではないかと考える。これらを可能にするのも前項のコミュニケーション行動への意欲とモチベーションが欠かせず、音楽の力や働きかけが功を奏したと考える。

11) 保護者と子どもとのかかわり

現在、Ritomicoの個人セッションでは、小学生以下の児童は保護者の同席を参加条件としている。音楽空間のなかで、セラピスト、児童、保護者の三者が同等に歌い、演奏し、遊ぶ時間を積み重ねている。保護者との振り返りではRitomicoで共に体験したことが家庭でも共通の話題となり、言葉と言う形でなくても、音楽が共通の言語の役割を果たしていると聞いている。保護者と子どもが「共通の体験」、「共通の音楽」を持つことは、関係性を深め、保護者と子どもをつなぐものとなっていくことを願っている。

おわりに

本報告書では、令和7年度の Ritomico の活動の振り返りを、国家資格化のキーワードである「つなぐ」をめぐって考察を加えた。Ritomico での音楽療法是、国家資格化の求める専門家と「つなぐ」役割に向かうにはまだ課題があるが、現在地として自分らしさや、自分の内と外、気持ち、からだ、自己肯定・自己成長など自分自身を生き生きと発揮できる力につながる役割を果たしているのではないかと考えられた。

センターを立ち上げて2年半が経過した。継続して通っている子どもたちや、保護者の皆様、運営を支えてくださっている事務局の皆様に感謝申し上げます。また今年度は2名の音楽療法スタッフで取り組めた。次年度はより多くの児童の受け入れができるよう2部屋の稼働を予定している。次年度も地域に貢献できる場として、学生や卒業生などの研鑽の場として Ritomico を活用できるよう努力を重ねたい。
本報告に関する利益相反はない。

文献

[1] 加藤博之：子どもの世界をよみとく音楽療法
特別支援教育の発達の視点を踏まえて．明治図書．
2007． p140-144